

結縁灌頂と社会性について

布施 浄明

はじめに

檀信徒のみならず一般社会に対して、真言密教の教えや功德を如何に信じ理解してもらうことは教化の上で大切なことである。これが真言密教の興隆にかかわるか否かである。それは、仏陀釈尊の追体験を通して、僧侶が悟りを求道求学することから所願を成就し、一切衆生への教化活動を行うことで、衆生を救うことである。今日諸寺で行われる慶事（落慶法要等）に際して多く結縁灌頂が行われている。ここで檀信徒は曼荼羅に入り、御本尊（大日如来）と縁を結び、その寺の本尊と住職に対して深い信仰と、真言密教の教えに触れるのである。こうして多くの人々が不思議な仏縁により住職の弟子となるのである。

一方、この混沌とした社会は佛教に何を希望しているのだろうか。この質問に我々はどうか答えていけばいいのか。非常に難しい問題である。それは今まで祖師先徳達が築き上げてきた伝統をもう一度見直し、現代に即した

解釈を簡潔に示す必要がある。在家者が密教に触れるものとしては葬儀、法事などの仏事等があげられるが、これは真言密教だけでなくそれ以外の宗派でも触れることが出来る。しかし、密教に限っては結縁灌頂という儀式があげられる。布施淨慧師によれば、日本では、「宗祖大師以前に延暦二四年（八〇四）三月丙申伯春国から玄賓を請召して「於殿上行灌頂法」という記事があり、或いは『類聚国史』には延暦十六年（七九七）五月「於禁中行灌頂経法」とあることよりして奈良時代において、記録的には少ないが事実行われていたことは信用してよいようである」（布施淨慧著「弘法大師と灌頂」『智山学報』第二十二輯 弘法大師研究論集、昭和四十八年六月）とある。延暦二十四年は宗祖大師が入唐した年で、延暦十六年は『三教指帰』を著した年である。この時から灌頂儀式は行われていたとされるが、その形式は定かでない。宗祖大師が帰朝して始めて灌頂を開壇したのは弘仁元年（八一〇）である。これは実慧に授けたことで知られている所で傳法灌頂である。さらに弘仁三年（八一八）に日本で始めて結縁灌頂を行っている。これは高雄山神護寺で伝教大師最澄をはじめ四名を受者としておこなったのである。こうして日本で結縁灌頂は開壇されるようになり、真言宗を中心にして広く行われるようになった。そこで本論文では、結縁灌頂をテーマにしてその社会性を考察したいと思う。

一、灌頂の特性について

灌頂は頭に水を灌ぐ儀式にして、古来インドでは王位の即位式などで行われてきた一大儀式である。密教にもこの儀式を取り入れて、密教の秘奥を嫡々と受け継がれ、阿闍梨から弟子へと厳肅に授受され、今日に到っている。この灌頂に大凡、結縁灌頂・受明灌頂・傳法灌頂の三種類がある。

受明灌頂は、真言密教を修学する者に対して行われる灌頂で学法灌頂ともいう。五種三昧耶の説中第三三昧耶

に相当するもので、第二三昧耶で得た一尊の一印一明を授け、この行法を伝授するものである。また時と人と場所を選んで行われる。結縁灌頂は器非器を選ばず、曼荼羅諸尊の一尊と縁を結ぶ儀式である。

さて、結縁灌頂とは『大日経』『大日経疏』所説の五種三昧耶の説に見られる「入観」(第二三昧耶)の段階である。また『金剛頂瑜伽中略出念誦経』には灌頂の次第が示されており、これらをもとに今日結縁灌頂の次第が構成されている。また、真言密教の行位から考えると結縁灌頂は、曼荼羅上の一尊と縁を結ぶ儀式にして、真言密教行位上でも初門とされる。投華得佛により有縁となつた一尊の一印一明行じ、次いで受明灌頂を受ける。これは行者が四度加行を行じることを許可される灌頂である。さらに四度加行が成満すると傳法灌頂を受け、阿闍梨位となる。いわば結縁灌頂は僧侶にとつても重要な灌頂である。

このように結縁灌頂は衆生に対する教化の一つとして行われる場合と僧侶としての行位の一環としての二面性があるが、在家出家問わず、広く真言密教入門として行われる灌頂である。この灌頂を受ける特性は、『略出念誦経』巻一(大蔵十八・二二四・A)に

「この大壇場に入るべきものは器非器を簡擇すべからず。所以いかなとなれば世尊或いは衆生ありて大罪を造らんもの、これらのこの金剛界大壇場を見已りて入ることあれば一切の罪障皆遠離することを得」とある。結縁灌頂の中で特に重要視されるのは十善戒を授ける場面である。これは、社会で生きる衆生に対してその戒めと、佛に仕えるにあつたての誓願である。現代社会において多くの罪障によつて清浄なる菩提心を欲望に覆われてしまった心を、この結縁灌頂を受けることにより、その罪障は消除され、しかも灌頂を受ける受者の器量を問われることはないのである。広く真言密教を興隆するに適したもので、密教を直接触れることが出来る灌頂である。

二、結縁灌頂について

灌頂は『大日経疏』卷十五（大藏三九・七三七・A）の五種三昧耶の説によるものである。五種の内結縁灌頂は第二三昧耶に相当する。

「第一はただ遙かに曼荼羅を見ることを得。いわく、曼荼羅を造る時、具足の曼荼羅を見んと謂うが如し。ただちに諸人ありて、善心を以て随喜して、礼拝して華香等を以て遙かに道場に散して供養をなし、是の如くの法会を見ることを得しむるが故に、無量の罪業、皆滅除することを得。然れども未だ彼の真言及び印を授くべからず。

第二は曼荼羅の座位を見る。いわく彼を引きよ壇中に入れ、礼拝供養し、華を投げて本位に散らしむ。師彼に告ぐ、汝の華はその尊位の上に墮つと、為に本尊の名号を説き、並びに壇門の内に入れて悉く諸位を見ることを得せしむ。この人を説きて第二の三昧耶と名く。もし真言及び印を請へば、亦所応の者に随いて之を授くるを得」

第一の遙見曼荼羅位は、大曼荼羅供を一目見て、そこでは一体何が行われているのか興味をもち、菩提心が起さる段階である。現在各寺院において、これに例した行事をなしているが、經典に説かれている効果があるのだろうか。寺院に身をよせて談話をかわしていく方が多くいらつしやるが、その次の段階である灌頂に入ると望む人は数少ない。そこに宗教の社会性を考えるのであれば、寺院を護持する僧侶と、檀信徒との間でコミュニケーションをとらなければならない。事相の立場からは、經典に説かれる内容を吟味し、一つの方便として灌頂があることを示すにとどめたい。

第二の位は、菩提心を発した衆生が、いよいよ曼荼羅壇に入る位で、事作法をともなつた灌頂に入る。投華得佛をなし、有縁の尊の第一印象を授けられ、三昧耶の境地に入ることを得る。即ち結縁灌頂である。

さらに、『金剛頂瑜伽中略出念誦經』卷一（大藏十八・二二四・A）に説かれる結縁灌頂についての所説を見ると次のようである。

「この金剛界大壇場に於いて、金剛弟子を引入する法を説くべし。その中且く入壇する者は、盡く一切衆生界を救護し、利益して、最上所成事を作すが為の故に、この大壇場に於いて、應に入るべき者は、器と非器とを簡擇すべからず。所以は何となれば、世尊よ、或いは衆生あつて、大罪を造る者も、此等にして、この金剛界大壇場を見已り、及び入ること有るものは、一切の罪障皆遠離することを得べし。

世尊よ、復衆生あつて一切の資材・飯食・欲樂に耽著し、三摩耶を厭惡して、供養を勤めずとも、彼の人等、壇場に於いて、意に隨いて事を作さしめ、入ることを得るものは、一切の求むる所、皆円満することを得せしめ玉え。

世尊よ、或いは衆生あつて、妓樂・歌舞・飯食を樂しみ、意の所以に隨ふが為の故に、一切如来の大乗を了知せず、法を問うこと無きが為の故に、余の外道の天神廟壇の中に入り、一切の所求を成就せんが為の故に、衆生の事を攝取して、能く無上の愛喜を生ずるものは、一切如来部の壇場戒に至つて、怖畏を怕るるが故に、これに入らず、彼等、惡趣壇道場に入住する者も、亦金剛界大壇場に入るに堪ふるなり。一切喜樂、最上成就を獲、意悅安樂を得るが為の故に、及び一切の惡趣の所入道門を退かんが為の故に、禪解脱等の地に於いて、勤修苦行す。亦為に彼等、この金剛界大壇場に於いて、纔に入るも亦得。一切如来の眞実の法は得難きにあらず。何に況や諸余の所成をや。

若し諸余の求めあつて、阿闍梨に求請し、或いは阿闍梨、余人の法器と為るに堪え、過失を離れ、広大の勝解あり。心行徳に敦く、信心を具足して他を利益するを見れば、是の如くの類を見已て、求請せずと雖も、應に自ら呼び取つて、之に告ぐ可し。善男子よ、大乘秘密行の儀式を當さに汝の為に説くべし。大乘教中に於いて、汝は是れ善器なり。若し過去の應正等覺、及び未來現在の依護者、所住の世間に利益を為すあらば、彼皆此の秘法を了するが為の故なり。菩提樹下に於いて最勝無想の一切智を獲得せる勇猛釈師子は、秘密瑜伽を獲得する由るが故に、大魔軍を摧破して、嬖人者を驚怖せしむ。この故に善男子よ、一切智を得んが爲の故に、彼に於いて應に正念を作すべし」

そもそも、灌頂とはインド王位に座するときに行われる儀式で、王の頂きに水を灌ぐことより由来するものである。この儀式を密教に取り入れ、密教の秘奥を確かに受法したことを証明するになぞらえたものである。結縁灌頂の場合は、出家在家問わずに曼荼羅諸尊に縁を結ばしめる為に修する灌頂である。この『金剛頂瑜伽中略出念誦經』では、壇に入る者は、その器と非器とを簡擇することなく引受する。また、罪を犯した者にも、曼荼羅を見已り、これに入れば、一切の罪障が消除する。しかるに、結縁灌頂を修せば、受者は密教に入門するだけでなく、曼荼羅諸尊と縁を結ぶことにより迷妄を破すことが大きな目的となる。密教の社会性を考察する上で、一つにこの点があげられる。人間によつて作り出されたこの社会で生きている我々は、毎日のように繰り返される苦悩との戦いに終始し、自分自身のことだけで精一杯である。当然ながらそこに欲望という「悪」に支配されているからである。こうした人間が繁多すれば社会においても、常識では考えられない事件が起きる結果となる。人間誰しも困惑した時に神仏に懇願するものである。これは信心があることからくるもので、これによつて心が穏やかになるのである。結縁灌頂を受けることによる功德を信じ、日々生活することが望ましいのではないだろ

うか。

三、三昧耶戒授受について

先にも述べたが、結縁灌頂の中で重要なのは戒を授ける場面であるが、結縁灌頂において先ず最初に三昧耶戒がある。この戒は、これから曼荼羅諸尊と結縁する前に受者の身口意を清める為のもので、十善戒を授ける。『大日経疏』（大蔵三九・六二六・C）に、「次に當さに諸の弟子の為に随順して法を説きて、其の心を開導すべし。彼を教えて、三度自ら帰依し、先罪を懺悔せしむ。既に懺悔し已りぬれば、身心清浄なること、猶明珠の如くして、真正の発心に堪能なり」とある。先の遙見曼荼羅位では、その器量になんの差別はないのだが、第二の灌頂になると、器量は問わないが、佛に帰依する心、今までの罪惡を懺悔し、身心を淨めることから入る。即ち、第二三昧耶は、弟子の罪障を除く為の灌頂をいい、清浄となつた弟子が曼荼羅内の一尊と縁を結び、入佛道を明かす階位にある。また、三昧耶とは元々「一所に行くこと」「出會い」、また平等・本誓・除障・驚覺という意味であるが、結縁灌頂とは正しく受者が曼荼羅諸尊と出會うことを因とし、佛の誓願である衆生救済と、我々が佛の世界へ行こうとする本誓が合一する儀式で、本来佛と衆生とは平等であるという意を三昧耶戒に集約したのである。

また、『大日経疏』（大蔵三九・六五六・B）に

「此の菩薩戒を受くる法は、別に行儀あり。菩薩発心して方便学処を攝受する所以は、皆如来の清浄の智慧を成就して、一念の中に於いて、三世の諸法に了達するに、罣礙無からんが為の故なり。並びに為に十種の方便学処を分別す。然れども此の三世無碍智戒は、凡そ結縁の者にも、皆豫め其の四種の根本と及び、三昧

耶とを聞かしめよ。又一偈をば、當さに耳語して、之を戒むべし。具支灌頂の者のみ、乃ち聞くべきのみ。其の斯の戒に住することあらん者は、乃至初めて心明道を見る時に、即ち是の如くの不思議の勢分あり。此の戒は親子能く佛慧を發生し、又二乗の律儀の限量あるに對するを以ての故に、三世無障礙智を以て名とす」

佛一菩薩一衆生という關係上、真言密教の立場からすれば、佛と衆生とは本来同質のもので、この兩者に差別はない。曼荼羅においても、大日如来と四佛、十六大菩薩、内外四供養等三十七尊の諸佛諸菩薩は相互供養という形をとつて出生を為しているから、受者が投げ打つ華がどこに落ちようとも、それは大日如来の影をひそめないのである。今ここで菩薩戒を授かるのは、受戒により清淨となつた身心が、如来の清淨な智慧を成就し、よく三世に通じ、差別ない佛智を獲得する智戒である。

また、宗祖大師の『御請来目録』の上表文中に、(弘大全一・六十九)

「われに授くるに發菩提心戒をもつてし、われに許すに灌頂道場に入ることをもつてす。受明灌頂に沐すること再三なり。阿闍梨位を受くること再三なり。阿闍梨位を受くること一度なり」

という記述から、入唐して最初に受けたのは發菩提心戒、即ち三昧耶戒である。この三昧耶戒は、現行の傳法灌頂で最初に行われる三昧耶戒と同じ次第で行われていたか、否かは別として、宗祖大師は、菩提心戒を授かり、一尊の印明を授かる為の受明灌頂を再三度にわたり受けていた。

『三昧耶戒序』(弘大全一・一三三)に、

「今、授くるところの三昧耶佛戒は、則ちこれ大毘盧遮那自性法身の所説の真言曼荼羅教の戒なり。もし善男子善女人比丘比丘尼清淨男女等あつて、この乘に入つて修行せんと欲はん者は、先ず四種心を發すべし。一には信心、二には大悲心、三には勝義心、四には大菩提心なし」

とあり、四種心の中二つめの大悲心と三つめ勝義心は、

「大悲心とは、また行願心と名づく。いはく外道二乗はこの心を起こさず。但し菩薩大士のいまして、能くこの心を發して、法界無縁の一切衆生を觀すること猶し己身の如し。然る所以は、善人の用心は他を先とし己を後とすればなり。また三世を達觀するに、みなこれ我が四恩なり。四恩みな三惡趣に墜して無量の苦を受く。吾はこれ彼が子なり。また彼が資なり。我にあらざれば誰かよく拔濟せん。この故に、この大慈大悲の心を發すべし。大悲はよく樂を与へ、大悲はよく苦を抜く。拔苦余樂の本、源を絶つ首は法を授かるには若かず。法樂万差なりといえども、前に説く所の八種の法門はこれ彼の本なり。然れども機根に隨順するが故に淺深遲速あり—中略—

異生羝羊の凡夫は専ら十不善等の業を造り、三毒・五欲の樂に耽つて、會て後心の三途の極苦に墜すること知らず。この故に眞言有智の人、樂著すべからず」

とあり、この四種の戒めを堅持し続けることが重要となる。

また、宗祖大師は、『三昧耶戒序』（弘大全三・一三七）の中で次のように解している。

「諸佛如来、この大悲・勝義・三摩地をもつて戒となし、時として暫くも忘るることなし。何が故にか、これをもつて戒と名づくる。戒に二種あり。一には毘奈耶・此には調伏と翻ず。二には尸羅、翻じて清凉寂靜という。一切の衆生を觀るに猶し己身及び四恩の如し。この故に敢えてその身命を殺害せず。衆生を觀ること猶し己身の如し。故に敢えてその所有の財物を奪盜せず。衆生を觀ること猶し四恩の如し。故に敢えて凌辱汗穢せず。衆生を觀ること猶し己身四恩の如し。故に敢えて欺誑せず。衆生の觀ること己身四恩の如し。故に敢えて粗惡の語をもつて罵詈せず。衆生の觀ること己身四恩の如し。故に敢えて離間せず。衆生の觀る

こと己身四恩の如し。故に敢えて所有の財色を貧求せず。衆生の観ること己身四恩の如し。故に敢えて前人を瞋恚せず。衆生の観ること己身四恩の如し。故に敢えて愚癡の心行を起さず。これすなはち大慈悲の行願に由るが故に、自然に十不善の心を離るるは即ちこれ調伏の戒なり。その悪心を離るるに由るが故に、心中に清涼寂靜なることを得。これ即ち尸羅の戒なり。またこれ饒益情の戒なり。」

発心前の諸罪障を受戒することにより、発心前の諸罪障を、受戒することにより、清浄ならしめる所以は、十善戒を護ることにある。随つて結縁灌頂の中で最も大事なのがこの十善戒であり、弟子の器量を問わないのである。

さらに、『秘密三昧耶佛戒儀』（弘大全二・一四三）には、

「弟子某甲等、過去無始より已来、ないし今生に今日に至るまで、無明迷覆して、淨心を違失し、妄想攀縁して、もろもろの分別、貧瞋癡等の無量の煩惱、忿恨慳嫉のもろもろの随煩惱を起し、もろもろの我慢を起して、仏法僧を謗り、一切の財物を侵奪し、盜竊し、故煞し、悞煞して、衆生を損害すること縦恣、愚癡にして、もろもろの貧染を起し、酒を飲み肉を食らい及び薫辛をもつて伽藍を汗穢し常住を侵損す。妄言、綺語、悪口、両舌、破戒、破齋、五逆、十悪、かくの如き等の罪、無量無辺なり。我今誠を至して発露懺悔す。願わくは罪消滅せん。滅罪の真言にいはいく、オンサラバハンバタカノウバザラソワカ」

この十善戒を「身三口四意三」と解すことが出来るが、佛の三密と衆生の三密とが加持感応したとき即身成仏の悉地を得るのであるが、初めに、無始よりの悪業を消除し、仏法僧に帰依することを誓い、この戒を授かった後もこの戒を護つていくことをも誓うのである。

灌頂と社会（結縁灌頂の実際）

真言密教が社会と歩み寄る接点としては、通夜、葬儀、告別式、各種教化事業等がある。新興宗教が勢力を増している現在において、既成佛教は吸引力を失いつつある。しかし、不景気のこの時代で、社会が宗教に望む事は一体何なのか。平安末期から江戸時代に到るまで新宗教が日本に入り、一般庶民はこぞって入信し、衰退するのを防ぐ手だてとして、盛んに結縁灌頂が行われてきた。

朝廷の勅許により初めて日本に於いて結縁灌頂が行われたのが承和十年（八四三）十二月十二日である。実慧が真紹に対して東寺で行われた。それから毎年東寺において二季行われてきたが、この灌頂は真言密教修学する者の為の灌頂で、春の灌頂は胎蔵界、秋の灌頂は金剛界で修されていたようで、また春の灌頂は受明灌頂であったと考えられ、秋の灌頂は傳法灌頂であったと推察される。従つて今日の結縁灌頂とは異質のものと考へなければならぬ。

『三寶院流洞泉相承口訣第十六結縁灌頂式口訣』運動記に、（真言宗全書三十三・三九〇）

「此の二巻の式は般若寺の御作とも云う。又、成賢僧正とも云う。根本一巻の式は延喜十九年東寺灌頂の料に般若寺僧正御作云々。其の式は傳法の式の如く禮佛金胎共に一巻に之有り。取替え隔年に之を用う云々。広沢には遍照寺僧正寛朝の作（巻二）、又は北院御作の二巻の式之を用う云々。当時所用の式は野澤通じて用ゆ。大都同也。上古は、東寺灌頂院にて春は傳法、秋は結縁之を行ぜらるるども毎年也。然るに結縁金胎隔年之を用いられる。作法之を記せられる。殊に勅願の為に嚴重の儀式也。則ち此の式東寺に於いて之を行じらる。作法之を記せられる。上古の作法今時の作法と前後するところ之有るなり。今時は外の寺にて金界に之を行じ、胎に就いて行ずることは稀也。上古は先ず結縁灌頂を受け、後に傳法灌頂を受く」

東寺において行われた春秋結縁灌頂の次第は、野澤通用の次第を用い、般若寺観賢僧正（八五三―九二五）の次第を用いていた。これは遍智院成賢（一一六二―一二三二）も記している。東寺に於ける春秋二季の灌頂は、実慧が朝廷に奏請し、承和十年十一月太政官符として灌頂院において傳法・結縁の灌頂を行うようになった。

結論

宗祖大師が唐において惠果阿闍梨より灌頂を授かったことに端を発し、現在の真言宗が形成されているのであるが、こうした伝統ある法燈、法脈を堅持することこそ、宗の財産であり、今後の発展につながるものである。天台宗においては、比叡山に最澄以来燈明を灯し続けている。最澄の教えを開宗から後世に到るまでその意志を継いで護り続け、信仰心の厚さが伺いしれるものである。伝統こそ文化であり、その時代の象徴を表している。

阿闍梨より受者灌頂の意味するところは、法の伝授・相承であるけれども、その法とは何なのか。これは密教独自の秘法にして本尊大日如来の境界をさし、或いは大日如来と一体となる行法のやり方である。それを代々相承していくことが法脈であり血脈である。

受者の器量を見極め授けられるのが傳法灌頂で、在家に対しては結縁灌頂と称して、投華得佛をしてその尊と縁を結び印明を授けられる。また、三昧耶戒を授かることにより、受者の身心は清められ、罪障を削除し、菩提心がおこり一切の悪趣を離れ、成仏の因縁を結ぶことになる。

また、結縁灌頂は、在家対象のもので、教化する一つの手立て（真言密教に触れる）としては大々的なものである。受明灌頂は、真言密教を修学する者を灌頂壇に入れ、弟子の資格を得るものである。東寺春秋二季の灌頂はまさしくこの受明灌頂であろう。今の結縁灌頂とは異質なものであった。こうして結縁灌頂と社会を考えると、

結縁灌頂を受ければ社会全体が平和になるはずである。最後に総本山智積院の結縁灌頂の次第をあげ各寺院においてこの結縁灌頂を修して真言密教の興隆を願っていただきたい。

総本山智積院の結縁灌頂

結縁灌頂の次第は、『結縁灌頂式』一卷・観賢、「結縁灌頂式」二卷・寛朝、「結縁灌頂式」一卷・覚法のものがあるが、現在の次第の作者は明確ではない。

傳法灌頂との差異は殆どないが、結縁灌頂は壁代を釣らず、金剛線、齒木等はない。

結縁灌頂 三昧耶戒堂上法要次第

先、装束の鐘

次、集会の鐘

次、上堂の鐘

次、讚頭発音

次、群立

次、大阿闍梨入堂

次、大阿闍梨着座

次、職衆入堂

次、大阿闍梨灑水加持

次、驚覺の鐘

次、総礼

次、乞戒師登壇

次、唄

次、散華・對揚

次、乞戒文

次、大阿闍梨受戒

先、表白

次、淨三業真言

次、普禮真言

次、懺悔文

次、三歸三竟

次、十善戒

次、發菩提心戒

次、三昧耶戒

次、祈念

次、普回向

次、終鐘

結縁灌頂と社会性について

- 次、乞戒師下高座
- 次、大阿闍梨下階
- 次、出堂
- 次、入壇
- 先、大阿闍梨入堂登禮盤、修法
- 次、教授、灑水発音（唱禮）
- 次、大阿闍梨振鈴
- 次、大阿闍梨下禮盤
- 次、五瓶移し
- 次、含香所作法
- 先、塗香
- 次、含香
- 次、灑水
- 次、普禮三昧耶印
- 次、覆面
- 次、引入
- 先、引入

次、香象

次、進入

次、壇前

先、華をはさむ

次、投華

次、覆面を取る

次、華を取る

次、曼荼羅拜

次、初めの小壇所作法

先、小壇所に受者引入

次、受者加持

次、灑水

次、宝冠

次、五鈷

次、明鏡

次、奥の小壇所作法

先、小壇所へ引入

次、秘印明

結縁灌頂と社会性について

次、血脈
次、教誡
次、八祖壇
次、出堂
次、大壇修法（後供養）

1. The first part of the paper is devoted to a study of the properties of the function $f(x)$ defined by the equation $f(x) = x + f(x^2)$. It is shown that $f(x)$ is a continuous function of x and that it is differentiable at $x=1$. The value of $f'(1)$ is found to be $1/2$.

2. In the second part of the paper, we consider the function $g(x)$ defined by the equation $g(x) = x + g(x^2)$. It is shown that $g(x)$ is a continuous function of x and that it is differentiable at $x=1$. The value of $g'(1)$ is found to be $1/2$.

3. The third part of the paper is devoted to a study of the properties of the function $h(x)$ defined by the equation $h(x) = x + h(x^2)$. It is shown that $h(x)$ is a continuous function of x and that it is differentiable at $x=1$. The value of $h'(1)$ is found to be $1/2$.